

家 庭

汗と涙と血を流して――グアテマラで



後頭部にガツンと激痛が走った。手を当ててみると血がべっとりついている。誰かに石をぶつけられたらしい。私は目の前で起こった殴り合いの撮影に夢中になっていた。

94年、中米のグアテマラ。いつものように声をかけながら撮影を始めた。だが、いくら明るく話しかけても、誰からも返事が返ってこない。立て続けに4人に素っ気なくされると、「もういい。写真だけ撮ればそれでいい」という気になってくる。

石をぶつけられて振り向く。「誰だ!」。思わず日本語でどなる。ほんかの騒ぎが一瞬、静かになる。しかし、またもや反応はない。その時初めて、自分の身に不安を覚えた。

地球
を
たがやす

見て
いる
つもりが、
見られていた

宇田 有三

こんな日は何が起こるかかわからない。早めに引きあげることにした。

翌日、路上生活をする子どもの保護施設で

働くマリオに、そのことを話した。「だから言っただろ、ごみ捨て場は危ないって。今日は、おれたちと一緒にいった方がいい」

マリオは街を巡回して、公園や教会の隅でシンナーを吸っている子どもを見つけたり、けがをしている子どもを治療したりする。3時間ほど歩き回って、最後にたどり着いたのは、石をぶつけられた場所だった。

子どもたちを集めて、傷の手当てをしていくマリオ。ふと、私の前に黙って立っている少年に気づいた。昨日、返事をしてくれなかった男の子だ。どうやら友だちと一緒に記念写真を撮ってほしいらしい。

今日はマリオと一緒に話しかける気になったのだろう。観察者のつもりでいたが、実はこちらが観察されていたわけだ。

◇

うだ・ゆうぞう フォトジャーナリスト。63年生まれ、神戸市在住。